クラーク博士と黒田清隆

～クロスする2人の男の物語～

〈第1回〉観光に利用された像と名言

●ジャーナリスト 黒田 伸
（文中写真も筆者）

羊ヶ丘展望台のクラーク像

さっぽろ羊ヶ丘展望台は北海道内でも屈指の観光名所だ。札幌を訪れる観光客がバスツアーを選んだら、時計台とともに必ずと言っていいほど立ち寄るポイントだ。

札幌市の南東部に位置し、市街地や石狩平野を見渡すことができる。札幌中心部から車で20分ほどで雄大な景色と、銀色の巨大人工物であるドームを眼下に望むことができる。

観光客のお目当ては、放牧されている羊たちと右手を水平に挙げ、左手は腰の後ろに回したクラーク博士のブロンズ像だ。

今年は記録的少雪でさっぽろ雪まつりに影響が出かねない、という新聞記事が出た2月初旬にこの地を訪れると、陽が翳り始めている時刻にもかかわらず、観光バスが何台も到着し、降りた客は真っ先に、クラーク像の前でポーズを取り始めた。

「はい、クラーク博士と同じように右手を挙げて。写真を撮りますよ」

バスガイドに促されて30人ほどの団体客は大人も子供も右手を水平に挙げ、手の方向に視線をやりながらポーズを取っている。

クラーク像の台座にはあの言葉が英語（大文字）で白く刻まれている。

「BOYS BE AMBICIOUS」

ウィリアム・スミス・クラークの名前を知らない人はいないだろう。少なくとも高校生以上の日本人なら誰もが知っているアメリカ人である。

クラーク博士とも呼ばれる。わずか260日あまりの札幌滞在だったにも関わらず「ボーイズ ビー アンビシャス」（Boys、be ambiciious）の言葉が一人歩きして、北海道の開拓者精神（フロンティア・スピリット）の象徴とされたり、キリスト教主義に基づく教育を北海道大学の前身である札幌農学校に根付かせた偉人として語られる。

▲羊ヶ丘展望台のクラーク像の前でポーズを取る観光客

クラークが札幌を去る直前に残した言葉は「少年よ大志を抱け」あるいは「青年よ大志を抱け」と訳される。

だが、この後に続いたとされる言葉「ライク ディス オールドマン」（Like this old man）まで知っている人はほとんどいない。さらにこの「this」が誰のことかでも、見解が分かれる。50歳を迎えたクラークが自身のことなのか、そばにいた誰かを指して言ったのか。

時は明治維新から9年後の1877年4月16日、雪の残る島松（現在の北広島市島松1番地）の駅逓所でクラークは、見送りに来た札幌農学校の学生らに向かって、この言葉を発したと伝わる。

音声データやビデオが残っているわけではない。あくまでも、その場にいた学生がその言葉を聞いて後世に伝えた。今となっては確かめる術はなく、一人の学生の記憶でしかない。それもクラークが去ってからかなりの年数を経てからの思い出話だ。

にもかかわらず、「名言」ともてはやされて長い間、受け継がれている。さらに、クラークはアメリカではほとんど知られていない人物であるばかりか、日本からマサチューセッツ州アマーストに戻ってからは、洋上大学計画に学長予定者として関係したり、54歳で実業家となり、金や銀の鉱山会社を設立したものの経営が悪化して差し押さえを受けるなど「博士」のイメージとは違う晩年だった。

心臓病のために亡くなったのが1886年3月9日で、帰国から9年後のことだった。日本での滞在は330日間、札幌にはわずか260日間しかいなかった。

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）